

2023年1月15日 降誕節第4主日礼拝

メッセージ「一人では負いきれないけど、必ず隣有り」

牛田匡牧師

聖書 出エジプト記 2章 13-27 節

今日は1月15日です。以前は1月15日が「成人の日」だったな、ということ  
を思い返しつつ、改めて調べてみたら、「成人の日」が1月15日から1月  
第2月曜日に変更されたのは1999年でした。ですから、いつの間にかに、もう  
24年も経っていました。さらに昨年からは、成人年齢が20歳から18歳に変更  
されましたので、先週の月曜日には、「18歳の成人式」ではなく、「20歳の集い」  
が各地でなされるなど、何だかますます複雑になってきています。

また併せて、この時期になると思い出されるのが、1995年の1月17日に発生  
した、いわゆる「阪神・淡路大震災」です。今からもう28年も前になりました。大  
地震によって、それまでの「当たり前」の日常生活が破壊されて、一変し、被災地  
では物流も情報も寸断され、混乱と不安でいっぱいだったのではないかと想像し  
ます。そしてその大災害を目の当たりにして、全国各地から支援の声が上がりまし  
た。その後も、全国各地で大きな地震や台風、集中豪雨など大きな被害を出す災  
害が続いています。また2011年には、甚大な被害が出た東日本大震災があり  
ました。あれから12年以上が過ぎても、まだまだ傷は深く、町も人々の暮らしも戻  
っていないという厳しい現実があります。ですが、その一方で、それらの大災害の  
ような大きな出来事があっても、残された人々は深い悲しみを抱きつつも、絶望し  
きって終わるのではなく、助け合い、支え合って、歩み続けてきているということもま  
た、私たちが覚えておくべき現実なのではないかとも思わされています。

今も、私たちの周りには新型コロナの「第8波」の感染拡大や、戦争、世界経済  
の混乱、物価の上昇など、一つ一つに目を覆いたくなるような様々な課題が多く  
あります。それらの中で私たちはどこに目を注いで歩いていけばよいのでしょうか。  
聖書の言葉に聞きたいと思います。

今回の聖書のお話は、「ヘブライ語聖書」の中から「出エジプト記」のモーセの  
お話でした。古代イスラエル人たちのアイデンティティー、民族としての自己意識  
は、「エジプトでの奴隷生活から、神様によって脱出させられた民」というものでし  
たので、この「エジプトからの脱出」いわゆる「出エジプト」というのは、現代のユ

ダヤ人、ユダヤ教徒の人々にとっても、中心的な出来事であり、語り継いでいくべき大事な物語です。その「出エジプト」を率いたリーダーがモーセでした。

今回の 18 章でも、モーセが民の指導者として、朝から晩まで人々が相談にやって来る問題や争いを裁く様子が描かれています。エジプトからモーセに率いられて脱出した古代イスラエルの人々は、「出エジプト記」の 12 章には「女性と子どもを数に入れず、男性だけで 60 万人だった」(37)と書かれていますが、女性や子どもたちなどを含めると総勢で 100 万人規模だったのでしょう。今の日本の「政令指定都市」の要件が人口 50 万人以上ですから、大きな地方都市一つの人口に相当します。それほど多くの人々を前にして、リーダーが一人で裁判をし続けるのは当然不可能です。ですので、まず 10 人ずつのグループを作り、それを 5 つ集めて 50 人のグループにし、それを 2 つくっつけて 100 人のグループにし、さらにそれを 10 個集めて 1000 人のグループにする。そして、それぞれに中心となるリーダーを決めて、縦に連なる組織を作っていくというのは、とても合理的で、賢いやり方のように思います。このような組織体制を確立することで、モーセは上手に古代イスラエルの民を治め、導いていくことが出来ました、というようにこのお話は読めますが、本当にそうなのでしょうか。

そもそも『聖書』以外には、古代イスラエル民族の出エジプトを示す史料は何も現存していません。紀元前 13 世紀前後に、100 万人や 10 万人規模での民族の大移動があれば、何かしらの記録や痕跡があって然るべきですが、現在の歴史学や考古学では、何も発見されていません。ですから、エジプトを脱出した古代イスラエル民族の規模、人数は、記録に残されない程度の小規模だったのだろうと考えられています。しかし、たとえ人数が数万人や、数千人、数百人の規模だったとしても、彼らが命の神ヤハウエによって、エジプトでの奴隷としての困窮生活から救い出され、脱出できたということは、民族のアイデンティティー、自己理解として、とても重要なことであるということには何も変わりはありません。

次の疑問として、モーセが来る日も来る日も毎日、朝から晩まで民の問題を裁いていた、ということについて、本当にそんなことがあったのか、ということも気になります。この物語は、モーセの<sup>しゅうと</sup>舅であるエトロが、モーセが疲れ切ってしまうように、組織作り、体制作りをするように助言した、というお話で書かれていますが、同じ内容の話が「申命記」1 章では、モーセ自身の発案で民に対して組織作りが

提案されて実施されています(9-18節)。また「1000人隊、100人隊、50人隊、10人隊」という組織体制は、軍隊の組織体制であり、徴兵の際の単位であることから、モーセの時代よりも、ずっと後の時代の組織体制がここに描き込まれているのだらうとも考えられています。そうしますと、このお話では、モーセがしっかりとした組織体制、裁判制度を確立しましたということではなく、一体何が述べられているのでしょうか。

このお話に何度も登場する言葉として、「裁く」という言葉(シャーフアト)があります。この言葉を聞くと、私たちはすぐに現代の裁判の様子を連想するかと思います。確かに、古代の指導者たちは、双方の間だけでは決着がつかない民の問題の相談に乗り、判断し、裁定を下すということがあったと思われます。どうにも判断がつかない時には、「ウリムとトンミム」と呼ばれるサイコロのようなものを使って、神託、神の意志を伺い、それによって判定を伝えるということも行われていたようです。しかし、民の人数が多かったから、問題も多くて、モーセは朝から晩までずっと裁判にかかりきりだった、ということは、実際には考えにくいことだったのではないのでしょうか。

そもそも、この「裁く」という言葉は、必ずしも「善悪」「白黒」をつける裁判だけを表わす言葉ではなかったようです。「ヘブライ語聖書」の中には、「士師記」という物語がありますが、そのヘブライ語原語が「裁き」(シャーフアト)の複数形(ショーフェート)です。「士師記」に登場する数々の士師たちは、英語では「Judges」、裁判官たちと訳され、日本語でも以前は「裁き<sup>つかさ</sup>司」とも訳されていましたが、物語としては民の裁判場面が描かれているのではなく、士師たちが民を指揮して異民族との戦いを勝ち抜いていくというお話が中心になっています。

またこの「裁き」(シャーフアト)という言葉は、神の中心的な特性の一つである「公正・正義」という言葉(ミシュパート)と同じ語根、同じ言葉の根<sup>ルーツ</sup>を持つ語でもあります。ですから、モーセにしても、後の「士師」と呼ばれる指導者たちも、常に裁判をしていたのではなく、民全体、またその一人一人に対して、正義を実現するように動いていた、働いていた、というように、広い意味で理解するのがよいのではないかと思います。ではどのようにすれば、「正義」は実現できるのでしょうか。釜ヶ崎の本田哲郎神父は、「正義(義)」(ディカイオシュネー<ツェレク)を「抑圧からの解放」と翻訳されていますが、どこに抑圧され、弱くされ、小さくされている

人がいるか、そのような人々が、抑圧の苦しみから解放されて、ホッと一息つくことができ、深呼吸することができるようになるためには、どうすればよいか。それを考え、実現できるように求めていく、ということなのではないでしょうか。

「ヘブライ語聖書」の中では、偉大な指導者のように描かれているモーセですが、「出エジプト記」2 章では、同胞のヘブライ人をいじめていたエジプト人を殺害してしまったことで、エジプト王ファラオから命を狙われ、逃亡していた犯罪者でした。そしてエジプトから逃げ出した彼を、かくまい助けたのが、ミデヤン人のエトロでした。モーセは彼のもとに滞在して、彼の娘ツィポラと結婚します。そして長い年月が経ってから、神様からの召命を受け、同胞たちをエジプトから脱出させるために、再びエジプトへと戻りました。モーセ自身も、決して一人ですっと強くて立派な人であったわけではありませんでした。

今回のお話を通して私たちに示されていることは、民の組織体制の確立や、裁判の効率化、ということではなく、むしろ一人では負いきれないような重荷、重責、課題であっても、そこには必ず助けてくれる仲間がいる、決して一人ではない、ということではないでしょうか。「必ず隣有り」という言葉は、聖書の言葉ではなく、中国の古典『論語』（里仁 25）の中にある孔子の「徳不孤、必有隣（徳孤ならず、必ず隣有り）」という言葉ですが、聖書の言葉に通じるものがあると感じています。

阪神淡路大震災の時も、東日本大震災の時も、「もう駄目だ」「絶望しかない」という時にも、気が付くとそこには助けてくれようとする隣人の姿がありました。「必ず隣有り」、言葉を換えれば、「あなたは一人ではない、孤独ではない」ということです。何故、そのようなことが言えるのか。それは、私たち、神様から命を与えられ、生かされている全ての人々は、クリスマスに生まれた「インマヌエル（我らと共にいます神）」のイエス・キリストと共にいるからです。そしてその命の神は、十字架の死を越えてなお、死から引き起こされて生き続けておられます。つまり、私たちの肉体の生においても、死においても、そして死を越えた後においても、私たちは命の神の中に生かされているということです。

そしてまた私たちは、神様と共に生かされている命として、今、この時も、隣にいる弱く小さくされ、抑圧されている仲間たち、友達の方へ、「あなたは一人ではない」「神様が共にいて下さる」ということを身をもって証しし、示し伝えるために、それぞれの場所、時、そしてやり方で、遣わされていきます。